



旧測候所の隣接地売却へ

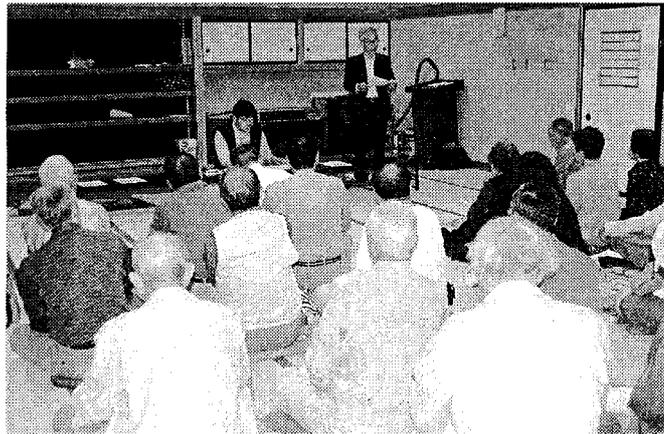
分譲業者が土地開発

保存する会「一定の成果収めた」 渡辺事務局長

三 島

「三島測候所を保存する会」は三十日夜、三島市東本町の東地区コミュニティ防災センターで、旧三島測候所跡地の買取運動にかかわる総括会議を開いた。集まった約五十人の地域住民らに、測候所跡地(旧庁舎隣接地)でのマンションの建設を断念し、その後保存する会とともに市に用地の買収などを求めている建築業者「マリモ」の担当者から、九月下旬に大手住宅建設業者と土地の売買契約を結んだことが報告された。

測候所跡地のうち、旧庁舎隣接地約二千四百平方メートルを計画したが、住民の反対運動などから断念。保存する会、地元東本町でマリモが取得し、十三丁目自治会とともに七階建てのマンション建設を期限に市に土地を



総括会議では地域住民にこれまでの活動の経過が説明された＝三島市東本町で

取得するよう働きかけたが、市は既に買収しない方針を政策決定していたことから、購入には至らなかった。

マリモと保存する会、地元自治会は、七月末までに市やその他の機関から土地取得の確約が得られない場合は、マリモによる第三者への売却を干渉しないなどとする覚書を交わしていたことから、八月以降、マリモは一戸建て分譲を前提に売却先を検討していた。マリモにはマンション建設を断念した後、地元を含む四、五件の業者から問い合わせがあったという。

総括会議では、マリモの宮本誠二技術本部長が

「一戸建ての業者に土地を売却することができた」と語り、これまでの経過とあわせて、売却先の業者が分譲に向けて道路や区割りの計画を進め、決済と引渡し時期は年末の見通しであることを説明した。

また、保存する会の渡辺博事務局長が「約四年にわたる市民運動で測候所施設が保存され、高

層マンション建設計画の中止、低層の住宅開発へと落ち着いた」と振り返り、「市民の純粋な思いが物事のある方向に動かす。皆さんの意思で一定の成果を収めた」と改めて総括した。

測候所跡地のうち、旧庁舎を含む約千平方メートルが取得し、「三島測候所記念公園」として十月一日に供用を開始。また旧庁舎は環境学習の拠点施設「エコ・センター」として活用するための準備が進められていることから、今後の利用と管理方法について意見を交換した。渡辺事務局長が「市民主導で有効に施設を活用するしくみづくりが必要」とし、市民主導の管理運営の実施を求める要望書を市に提出することを提案。了解を得た。

会議には市環境政策課の職員も出席。旧庁舎は修繕や内装などの工事を終え、年度内は市主催行事や共催行事に限り、公開することや同公園の供用開始について説明した。住民からは「駐車スペースが不十分」といった指摘もあった。

三島測候所跡地マンション建設

低層化要望、業者が拒否

三島市東本町の三島測候所跡地へのマンション建設計画で、市はこのほど小池政臣市長名で建築業者のマリモ（広島市）に低層化などを求める要望書を提出し、マリモ側は「法的に問題ない」として計画通り建設する方針を回答した。地元住民からは憤りの声が上がっている。



マンション建設反対や観測地点維持を訴えるのが並ぶ測候所跡地周辺。三島市東本町2丁目

住民 観測断念を懸念

計画では、マンションは十三階建て、高さ三十九メートル。要望書は一従前の良好な環境が損なわれ「とした上で、同地区では十五メートルという都市計画上の建築物の高さ制限を予定していることを説明し、これを踏まえるよう求めている。

さらに、市が買い取った測候所庁舎部分は今後「エコセンター」（仮称）として環境教育の場に活用する方針を示し、跡地での無人観測がマンション計画によって全面移転せざるを得なく

なることへの懸念を表明した。

これに対し、マリモ側は「国有地入手の落札では利用形態の制限もなく、要望は極めて理不尽で到底納得できない」と回答した。

地元の東本町二丁目自治会は、高層マンション対策委員会を設置し、現時点では「いかなるマンションの建設にも反対する」という姿勢を崩していない。藤幡俊量自治会長は「市の要望書への回答を知り、あらためて業者の強硬さを感じた」と話した。自治会は近く、現在地での無人観測の完全継続を呼び掛けるのほり旗を自治会外にも掲げ、運動の全市的な広がりを目指す。

1万440人分の署名を豊岡武士市長(右)に提出するグラウンドワーク三島のメンバー



ミシマバイカモ繁殖池水源

三島市 湧水地買収へ

NPO法人署名1万人突破

ミシマバイカモの繁殖池三島梅花藻の里(三島市南本町)の水源となっている西隣の湧水地が宅地造成で枯渇の恐れが出た問題で、NPO法人・グラウンドワーク三島が27日、豊岡武士市長に保全と買い取りを求める1万440人分の署名を提出した。市は土地開発公社を通じて年度内に土地を買収する方針を明らかにした。【石川宏】

緑地に整備、カフェも検討

市によると、土地75 整備にはグラウンドワー
1平方メートルのうち湧水地の ク三島も関わる。
ある313平方メートルを市が ミシマバイカモは、清
買収し、残りは市内の民 流で育ち白い花を咲かせ
間企業が購入する。土地 る水草。市内の源兵衛川
を所有する不動産会社と から一時姿を消したが、
既に交渉中という。市と 環境保全の市民の努力で
企業は一体的に緑地とし 復活したことから、三島
て整備。企業は自然を生 市の自然保護のシンボル
かしたカフェの経営など となっている。梅花藻の
を検討しているという。 里は1995年にでき

た。
問題の土地は宗教団体が所有していたが、富士市の不動産会社が購入し、昨年宅地造成を始めた。グラウンドワーク三島は水源破壊の恐れがあるとして、昨年9月に署名と募金を開始。署名が目標の1万人を突破したため市長に提出した。募金は27日現在24万4365円集まった。
豊岡市長は「湧水地はしっかり確保し、多くの方の期待に沿えるようにしたい。バイカモの花言葉は『幸せになります』。三島に来てバイカモを見て幸せになってほしい」と述べている」と述べた。

清流の象徴 宅地開発でピンチ

「三島梅花藻の里」守れ

ミシマバイカモ

県のレッドリスト絶滅危惧Ⅱ類。三島市の楽寿園内の小浜池で1930年に発見。梅に似た花をつけることから名前がついた。かつては市内の川で普通に見られたが、60年代の湧き水減少と河川の水質悪化により姿を消した。現在は、柿田川から移植し増やしたものを「三島梅花藻の里」や源兵衛川の一部で見ることができる。



「水の都・三島」の清流の象徴、ミシマバイカモが群生する「三島梅花藻の里」(同市南本町)が消滅の危機に陥っている。生育に欠かせない湧き水の水源が宅地造成で埋められる可能性が出ているからだ。地元のNPO「グラウンドワーク(GW)三島」は、水源地の保全、購入を目標に募金活動を始めた。



㊦「三島梅花藻の里」前で、市民に署名と募金を呼びかけるグラウンドワーク三島のメンバーら
㊧購入をめざす湧水池—いずれも三島市南本町

NPO募金、水源買い取り目指す

「三島梅花藻の里」(約380平方メートル)は1995年から、GW三島や水辺の再生に取り組み市民団体「三島ゆうすい会」が中心になって整備を開始。清水町の柿田川から譲り受けたミシマバイカモを湧水池で育て、増殖させてきた。自生のもは夏場に花をつけるが、この里では1年を通して花を觀賞することができ、年間約20万人が訪れる観光スポットにもなっている。今問題になっている水源は、梅花藻の里から道路をはさんで西隣にある湧水池。かつては宗教団体所有の土地だったが、昨夏に富士市の不動産業者が土地を購入し、今年7月から宅地造成工事に着手した。

GW三島によると、水源が埋められてしまうと、梅花藻の里へ流入する湧き水が大幅に減り、里自体が消滅する可能性があるという。中心にあって世話をしているGW三島インストラクターの山口東司さん(72)は、生育の3要件として①豊富な湧き水②一定の水温(約15度)③こまめな清掃を挙げ、「もし、今より水量が減れば、ミシマバイカモは大打撃を受ける」と心配する。

GW三島は現在、不動産業者と交渉中。業者の担当者は「貴重な水源があることは知らなかった」として、「無理やり進めるといっわけではなく、ある程度待つのはやぶさかではない」と、交渉の余地はあるとの立場だ。

水源の湧水池は約50平方メートルだが、最近南側の地下にも水源があることがわかり、土地の買い取り目標を約350平方メートルとした。GW三島は「三島梅花藻の里 泉トラスト運動」として募金活動を開始。1口1千円で、1000万円を目指す。また、19日からは市内街頭で、1万人を目標に署名活動も始めた。

三島市は、多くの市民を巻き込んだ運動となって、保全への機運が盛り上がることを条件としながらも、「GW三島と足並みをそろえる」と協力の姿勢を示している。

GW三島の渡辺豊博専務理事は「ミシマバイカモは三島の水辺再生のシンボルでもあり、GWはいつも活動のシンボル。三島の宝を守りたい」と協力を呼びかけている。

問い合わせはGW三島(055・9833・0136)。(長尾大生)